

〔総括〕

移民・植民の歴史地理

—その論点と課題（シンポジウム総括にかえて）—

杉浦 直

本稿は、今回の共同課題シンポジウム「移民・植民の歴史地理」（歴史地理学会、2002年5月25日、和歌山市民会館）の成果を踏まえつつ、移民・植民現象に関する歴史地理学的研究のテーマ構成と論点を整理し、今後の課題を展望するものである。

1. 移民現象の類型とシンポジウムのテーマ

移民という言葉は移動する人々及び移動先地域の多様な属性を包含しており、この語を厳密に定義することは難しい。シンポジウム趣旨説明でも述べたように、狭義の移民と植民とは区別される。しかしながら、ここでは便宜的に移民を広義にとらえ、「人々がもとの居住地域とは制度的・歴史的に大きく異なる地域に移住・定着する現象ないしその人々自体」として定義したい。

このように移民を広く定義するとき、まず移住・定着先の地域によってその類型を考えておくことが重要となる。ここではまず、移民を①国内での移住による移民、②自国の勢力圏内（植民地など）への移住による移民（植民）、③他国への移住による移民の3つの基本的類型に区分する。その上で、移住の性質などにも目を向けつつ、①についてはA. 国内の開拓地（フロンティア）または内国植民地への移民、B. 国内の大都市への移住（いわゆるアーバン・エスニシティを生成）、C. 先住民の（多くの場合強制的な）移住、③についてはA. 奴隷労働力としての移住（導入）、B. 政治的・経済的理由による強制移住、C. （狭義の）移民ないし外国人労働者

（出稼ぎ移民）などをそれぞれサブタイプとして区別してみよう。移民現象は、これらのタイプないしサブタイプによって少しずつ異なる要因と属性をもち、一義的な性格を規定することはできない。今回のシンポジウムでは、②自国の勢力圏（植民地）内への植民及び③-Cの狭義の移民として、日本から移住した人々に焦点をあてた。

移民現象の考察に際しては、1) 移民を送出する地域（ないし国）における現象、及び2) 移民を受け入れる地域（ないし国）における現象にそれぞれ焦点をあてる基本的な2つの視点がある。前者がいわゆる出移民（emigration）、後者が入移民（immigration）であり、言わば地域的次元に関わる移民研究のテーマ・カテゴリーと言えよう。本シンポジウムは、主として入移民現象を重視して全体のテーマを構成したと言えるが、日本という特定の地域（国）から輩出した移民に限定したため、必然的に出移民と入移民をつなぐ視点を含むものとして考えていくことが重要であろう。ちなみに、今回のシンポジウムの石川報告では、沖縄から輩出した南米移民に限定したため、沖縄という送出地域の性格やそことのつながりが受入れ国における移民の性格形成・変容に影響した側面を窺うことができた。

移民現象を引き起こす要因に関しては、従来より出移民に関するプッシュ要因と入移民に関するプル要因が指摘され、さらに両者をつなぐ「移民の手紙」や移民情報などの重要性も認識されてきた。こうした枠組みで移民

現象を捉えていくことは、言わば2地域間、2国間の関係のなかで移民現象を考える視点と言える。しかしながら、近年の移民史学が志向するように、プッシュ・プル理論、2国間関係の枠組みを超えて、より広域的なネットワーク、グローバルな歴史的関係のなかで、時代背景を十分考慮しつつ、日本の近代が生み出した移民現象を考えていくことが、今後さらに重要となろう¹⁾。

II. 移民・植民の歴史地理のテーマ構成と論点－歴史地理学が移民研究にもたらすもの－

ここでは、典型的な学際的研究分野である移民研究において、地理学的研究、特に歴史地理学的研究がどのような独自の視点を持ち、移民研究にどのように資するのか、そしてそこにどのような課題が潜んでいるのかを考えてみたい。

今回のシンポジウムでは基本的に受け入れ国・受け入れ地域における移民現象を扱ったので、まずこうした入移民現象に関する(歴史)地理学的研究の論点・テーマを整理し、それぞれの論点・視点のもつ意義を考察する必要がある。しかしながら、地理学は空間的・地域的次元をもつ限りにおいてその主題は多岐にわたり、簡単に整理することは難しい。ここでは以下、歴史地理学的観点から特に重要と思われる4つの主題(テーマ)あるいは論点・視点を提示し、シンポジウムでの報告・議論を絡めつつ論を進め、さらに地理学的研究に本質的に付随する2つほどの一般的問題を考察することにした。

まず最初に取り上げる主題は、受け入れ国・地域における移民(とその子孫)の人口・居住分布、居住地域の把握である。移民の性、年齢、職業、土地所有などと絡めて移民人口の基礎的なデータを収集・構築し、それを空間的に理解していくという作業は、他分野の移民研究者が地理学に期待する最も基礎

的な研究であろう。アメリカ合衆国やカナダなどにおいては、センサスを中心にした人口地域統計において、「人種」、「外国系住民」、「母語」使用人口など移民集団の人口を推定できるデータの小地域統計が整備されているので、それらを使って移民エスニック集団の居住パターンの把握・検討が行われてきた²⁾。しかしながら、言うまでもなくこうした人口地域統計は研究者の望む国・地域・時代(年次)でいつも利用可能とは限らず、また詳細な空間的パターンを把握するのに必要な適切な分類の小地域統計が得られないことも多い。したがって、研究目的に応じて、官製統計以外の多様な資料の利用、地理的な分析に耐えられる資料の発掘が必要となる。今回のシンポジウムでは住所録類を使用した飯田報告、地籍資料を分析した山元報告がそのよい見本を提示していたが、こうした努力は当然今後も継続されなければいけない。そしてさらに重要なことは、こうした作業をただミクロな地域における移民集団の居住分布パターンの把握や居住地域の確認のみに終わらせることなく、山元報告でも示されたように地域的展開の動態的プロセスとして理解していくこと、そしてさらにミクロな研究を繋げてマクロスケールでの移民の空間的展開過程として把握していくことであろう。こうした方向性は、石川会員の長い研究過程でも意識されてきたことと思うが、この側面をさらに強めていくことが歴史地理学からの移民研究に特に求められていることなのではなかろうか。

次に2番目の主題として、移民が集中居住し、さまざまな活動を展開する地域(領域)を取り上げる。こうした地域は、アメリカの文化・社会地理学において、農村部ではethnic island, ethnic province³⁾、都市部ではghetto (ethnic ghetto, immigrant ghetto), ethnic neighborhood, ethnic quarter, ethnic domain, ethnic enclaveなどさまざまな名称で表現され、実証的研究の対象となってきた

た。当然、世界各地の日系移民に関しても、その集中居住地域の構造と動態（形成・変容過程）の解明は、純地理学的に見ても重要な主題と言えよう。今回のシンポジウムでは、どの報告の内容も多かれ少なかれこのテーマと密接な関係をもっていたと言えるが、特に、カリフォルニアの農村地域における第二次大戦前の日系移民集中居住地域の構造をホスト社会の地域的枠組みと絡めて検討した矢ヶ崎報告は、その典型的な例となった。

この移民集中居住域の問題は、豊富な地理学的内容を含むだけに今後の課題も多いが、ここではエスニック・エンクレーブ論の限界とでもいったようなことに触れておきたい。今回、椿報告のなかでも取り上げられた移民後世代の居住分散、ホスト社会住民との混住化、それに伴う構造的同化という状況のなかで、現在では画地的に明瞭な移民集団のつくるエスニック・エンクレーブを見出すことが難しくなっていることも否定できない。エスニック・エンクレーブにおける移民集団の特性は地理学的にもビジブルで分かりやすいテーマを提供するが、今後は上述したような分散居住の状況下で、移民集団がどのような存在形態を呈するのか、集団としてどのようなあり方を模索し、どのようなメンバー相互の社会的ネットワークを構築していくのかを考えていくことも重要となろう。

3番目に取り上げたいテーマは、移民の社会的・文化的特性とその変容である。この主題は、アメリカの文化人類学や社会学においては、エスニシティというキーワードの下で語られてきた。すなわち、受け入れ国における移民集団を移民エスニック集団、エスニック・マイノリティとしてとらえ、その集団的性格をエスニシティとして把握していくことが有効であると考えられてきた。ここでエスニック集団 (ethnic group) とは、国民国家の社会 (national society) の枠組みのなかの

下位集団、ほかと区別できる住民集団を指す。移民という過程は、それまで相対的に同質であった国民社会のなかに異質な住民集団をつくり出す典型的な過程である。エスニシティは、このエスニック集団がもっている性格であるが、特にほかと比較してその集団の特色となっている社会的・文化的性質、あるいはエスニック集団としての特質や結合を保っている状態⁴⁾を意味する。

移民は、母国の文化的・社会的状況を背景としつつも、そこから切り離され母国とは大きく性質が異なる受け入れ国の社会に参入・定着し、そこに適応・統合する過程でその集団の性格あるいはエスニシティを変化させる。そこでは、移民地において母国の文化をどのように受け継ぎ、また再生させるかという文化継承の問題がクローズアップされるとともに、ホスト社会の文化との持続的な接触によってその文化が変容を余儀なくされるという文化変容（文化の接触変容, acculturation)の主題が浮かび上がる。今回のシンポジウムでは椿報告が、多文化社会カナダの日系人コミュニティを対象として文化継承活動の実態とその変遷を詳しく検討したが、そこにおいてそれらの状況が国民社会や地域社会の性質と密接に関係し、また特定の場所との結びつきが見てとれた点は地理学的にみてきわめて興味深い。もとより、文化継承や文化変容の過程は、移民集団が新しい環境的・場所的状况に適応する過程で生ずる現象であり、地理学的には空間的・地域的次元をもった過程として捉え直していかねばならない。今後とも、これらの過程を居住パターンや土地との結びつき、あるいは特定の場所との関係を踏まえて空間的視点から捉えていくことが肝要となろう。そして、その際強調しておきたいことは、こうした関係をただ機能的・表層的なものとしてだけ見ないで、エスニシティの再活性化を場所の構築や場所の意味付与と結びつけ、象徴的次元を重視して考えて

いく、言わば人文主義地理学的方向性が今後ともますます求められよう。

4番目の主題として、移民の文化生態と地域的・社会的統合の問題を考えたい。ここで言う地域的・社会的統合とはいささか分かりにくい表現であるが、要するにある地域的事象が地域の他の多くの事象と現象的にも因果的にも密接に結びついて一定の統合的な姿を呈している状況のことである。ジョーダン(Jordan, T. G.)とロウンツリー(Rowntree, L.)は、こうした概念を文化統合(cultural integration)と表現し、文化地理学における5つの基本テーマの一つとして位置づけた⁵⁾。移民集団は地域的に展開する過程でその地域の自然環境や土地条件に適応し、また地域の文化・社会・経済の多くの要素と因果的に関連しあって、地域的・歴史的に独自の具体的な相を現す。特に、久武コメントでも指摘されたように、移民は社会集団間のニッチを利用しつつ、地域経済の特定の相と結合してその生計基盤を獲得することが、その存続のための最も重要な条件となる。もとより地理学は他の分野では捨象されがちな空間的次元を重視して地域における現象の実態を具体的に描き出すところにその方法論の最大の特徴があり、こうした観点を含んで移民集団の地域における実態を検討した地理学的研究は、アメリカにおけるドイツ系農民の独自の農業体系と慣行に関する一連の研究⁶⁾をはじめとして比較的多く見られる。今回のシンポジウムにおいても多かれ少なかれほとんどの報告にこうした観点が認められるが、なかでもアメリカ西海岸地域の農村部における日系移民社会が地域経済に統合していく姿を、ホスト社会における移民の適応戦略としてとらえた矢ヶ崎報告はその代表的なものと言えるだろう。周知のように矢ヶ崎会員は、これまでの研究においてカリフォルニアにおける日系人農業の特質を花卉栽培農業と市場向け蔬菜栽培農業に焦点をあてて精力的に研究し、

『移民農業—カリフォルニアの日本人移民社会—』(1993, 古今書院)において集大成したが、日系人と地域経済との結合は農場のみではなく、彼らは都市部においても都市的雑業の種々の職種に就き、またさまざまな自営小ビジネスを経営した。シンポジウムの飯田報告においては戦前ハワイのホノルルにおける日系人職業構成が分析されたが、この都市部における日系移民と地域経済との結合の主題に地理学的な視角から本格的に取り組んだ研究は意外に少ないだけに、この分野での研究のさらなる進展を期待したい。また、これらの問題を、山下コメントでも指摘されたように、より大きな枠組みのなかでの農村や都市における社会的・経済的過程のなかに位置づけて検討していく作業も、今後さらに展開していく必要がある。さらに、移民の環境認知や経済活動の過程における場所への意味付与といった人文主義地理学的視点を導入することによって、文化生態や地域的統合の主題の追求に新しい可能性が開けてくることも付け加えたい。

以上、入移民現象・入移民過程に関わる4つの重要なテーマに沿って論じてきたが、もちろん上記の議論でもって移民・植民の歴史地理の主要な論点が尽くされたわけではない。今回のシンポジウムにおいて触れられなかった点、あるいは十分な照射が当てられなかった点を整理することは難しいが、ここではとりあえず1)移民の定住・展開過程に国家・地方政府の政策や制度的・行政的枠組みが与える影響、2)日系移民と他の移民集団との空間的・社会的関係や、移民をカテゴリー化し、特定の領域(空間的意味でも社会的意味でも)に閉じ込めようとするホスト社会の住民のまなざし、3)移民集団の地域的あり方やその成員の空間的行動に絡む資本、労働市場、消費、ジェンダーなどの諸要因、などを挙げておこう。このうち、1)の視点に関連して、椿報告ではカナダの多文化主義

政策と日系人の文化継承運動との関係が報告されたが、質疑応答では本格的に焦点をあてることができなかった。また、植民の場合は当然彼らを送り込む国家政策が、その地域的展開過程を大きく左右する。山元報告や木村コメントでもこの点への目配りがなされていたが、今後ともこの側面の考察を深めていく必要がある。3)の論点に関しては「シンポジウム趣旨説明」でも述べたように特に今日的な課題でもあるが、言うまでもなく近代以降の移民現象に焦点をあてる歴史地理学においても無縁な問題ではない。いずれにしても、上記のこうした諸点について詳しく論ずることは今回のシンポジウム総括としての本稿の目的を越えているし、筆者にその十分な準備があるわけでもないので、ここでは論点の指摘のみに留め、以下地理学的研究に本質的に付随する2つほどの一般的問題に触れておきたい。

まず、地域的比較の視点について考えておきたい。言うまでもなく比較という視点は、リッター (Ritter, C.) 以来、地理学にとって最も基礎的な方法の一つとなっており、地理学者は研究を行う際、常に何らかの地域比較を行っているとも言えるが、地域の比較という方法を中心に据えた本格的研究は思ったほど多くはないというのが実情ではなかろうか。その点、今回のシンポジウムでは、三木報告が樺太と北海道を対比することで、近代日本の移住現象の上での両者の位置づけを浮き彫りにしていたし、矢ヶ崎報告では自然発生的な日系人集住地と計画的入植地との対比が一つの柱であったことは特筆される。また、石川報告ではペルー、ポリビア、ブラジル、アルゼンチンの4ヶ国が取り上げられたが、当然そこでは比較の視点が強調されることになる。しかしながら、シンポジウム全体として見たとき、地域比較を踏まえてどのようなより一般化された認識が得られたかという点に関して、議論が深まったとは言いがた

い。もとより、様々な国・地域の報告を中核として一つのシンポジウムを構成したということ自体、地域的な比較から抽出される一般的フレームワークの構築が一つの狙いであったはずであるが、時間的制約や進行の都合からこの点に関して本格的な議論の展開に至らなかったことは反省点あるいは今後の課題として認識されなければならない。

次に山下コメントやフロアからの古田会員の指摘にもあった帰納的実証的事例研究と一般化・モデル化との関係について触れておきたい。伝統的地理学が現象の空間的パターンや地域の実態の把握と記述に偏しがちであり、移民や植民を扱った歴史地理学においてもこうした傾向が強かったことは否定し難い。しかしながら、もちろん移民を扱った地理学的研究においてもモデル化、理論構築の動きがなかったわけではない。総合討論のなかでも触れたように、ジョーダンとロウントリーのよく知られた文化地理学のテキストにおける都市の移民集中地域のコア、中間域 (middle)、縁辺域 (fringe)、郊外クラスター (outlying cluster) の4地帯区分と移民集団の経済的地位の上昇との相関に関する仮説は移民が形成したエスニック空間に関する一般的記述モデルとみることができる⁷⁾、モリル (Morrill, R.) の都市に移住したアフリカ系アメリカ人のゲットー (いわゆるブラック・ゲットー) の形成と維持の要因を考察した論考では、ゲットーの拡大に関するシミュレーション・モデルの構築が中心的な部分となっている⁸⁾。また、最近のカプラン (Kaplan, D.H.) による都市のエスニック経済に関する論文は、移民がエスニック・ビジネスを展開し、自らの商業・業務空間 (エスニック・タウン) を発展させていく状況の動態モデルを提示したものとも言える⁹⁾。今回のシンポジウムでは矢ヶ崎報告において日系移民の集中域に関する地域構造モデル的なものが示されたが、当然、日本からの移民・植民

を研究する際にも、こうした視点からの試みや提言は貴重と言える。しかしながら、移民という対象や歴史地理学という学問の性質を考えると、これまで歴史地理学者がその努力を注いできた関係資料（史料）の収集・分析という実証的手法の価値を軽く見てはならない。まだ十分利用されていない史資料を現地において発掘し、テーマによっては関係者にインタビューを試みる地道な努力こそ、この学問の最良の部分であり、また提示されたモデルや理論の有効性をそれによってこそ検証することができるのだということを改めて確認しておきたい。

Ⅲ. 移民研究が歴史地理学にもたらすもの — 結語にかえて —

最後に、移民・植民という対象を研究するというのが、歴史地理学に何をもたらすのか、どのような新しい視点と認識の変革をもたらすのかを考えてみたい。

移民現象は日本の近代が生み出した一つの重要な、かつ不可避な社会・経済的現象であったと同時に、日本の近代社会そのものに一定の逆照射を付与したと考えることができる。「趣旨説明」でも述べたように、その影響は今日の日本の内外における諸状況にも及んでいる。その地域性の部分、空間的次元をもって顕現してくる現象を見つめていくことで、おそらく日本の近代の歴史地理学は新しい知見と認識をもつことができるのではないかと期待される。特に、(典型的な)移民は近代の国民国家として形成された日本の国土領域を離れて他国に移住・定住した人々であり、彼(彼女)らの生活空間はその生涯において基本的に出移民地(日本)と入移民地(受け入れ国)の2つに分裂している。したがって移民現象を総体として理解することを目標にする限り、移民研究は必然的にこの出移民地と入移民地の双方を視野に入れていかなければならない。このことは、日本という地域

を絶対的な枠組みとして見ず、これを相対化していく視点をもたらすのではないだろうか。あるいは少し人文主義地理学的に言うならば、移動する人間から見て日本をもう一度見つめなおす新たなまなざしを獲得できるのではないだろうか。もう一つ強調しておきたいことは、「移民」が根底的に人間的現象であり、人間の空間的体験、移動の体験であるということである。シンポジウムにおいても、三木報告では移民のライフ・ヒストリーが中心的な資料として用いられ、椿報告においても人間の文化的な体験が重視されている。移民の空間的体験の本質を見つめていくということは、歴史地理学において人間的視点の導入の重要性を改めて気づかせてくれる、換言すれば歴史地理学の一層の人間化に寄与するのではないかと考えたい。

以上見てきたように、移民・植民の歴史地理学的研究は、他の分野の移民研究において欠落している、あるいは相対的に弱い視点・方法を提供することで移民研究に寄与するとともに、他分野の視点と交錯しつつ移民という対象を見つめていくことで歴史地理学がその地平を豊かにしていくことが期待されるのである。最後に、今回のシンポジウムが一つの契機となって、移民・植民の歴史地理の今後の課題がより鮮明になるとともに、多くの特に若い研究者の方々がこの分野の研究に参入されることを念じて、この稿の締めくくりとしたい。

【注】

- 1) プッシュ・プル理論の限界については、野村達朗「アメリカ移民史学の新展開—プル・プッシュ理論からグローバルな移住史へ—」, 移民研究年報8, 2002, 117~133頁, 参照。
- 2) 以下、杉浦直「エスニシティの地理学—方法論的展望—」, 季刊地理学50-3, 1998,

- 171～188頁, 参照。
- 3) Jordan, T.G. and L. Rowntree, "Ethnic Geography," in Jordan, T.G. and L. Rowntree, *The Human Mosaic: A Thematic Introduction to Cultural Geography*, Harper & Row, 1986 (4th ed.), pp.271-304.
 - 4) 前掲 3), p.273.
 - 5) 前掲 3).
 - 6) 例えば, ①Cozzens, A. B., "Conservation in German Settlements of the Missouri Ozarks," *Geogr. Rev.*, 33, 1943, pp.286-298, ②Tower, J.A. and W. Wolf, "Ethnic Groups in Cullman County, Alabama," *Geogr. Rev.*, 33, 1943, pp.276-285, など.
 - 7) 前掲 3), pp.282-283.
 - 8) Morrill, R.L., "The Negro Ghetto: Problems and Alternatives," *Geogr. Rev.*, 55, 1965, pp.339-361.
 - 9) Kaplan, D.H., "The Spatial Structure of Urban Ethnic Economies," *Urban Geography*, 19, 1998, pp.489-501.